

# OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.18

2016年5月

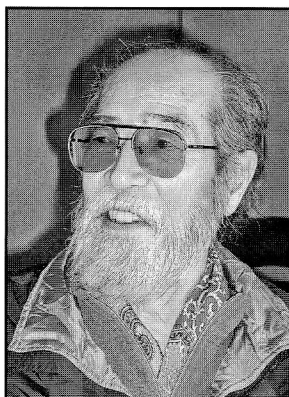
発行 大阪大学山岳会

〒562-0031 箕面市小野原東4-19-45

大野義照方

## 住吉仙也氏が死去

本会のヒマラヤP 29峰（7、871<sup>米</sup>）遠征を初登頂に導いた住吉仙也氏（1954年医学部卒）が昨年10月5日、西宮市の上ヶ原病院で亡くなりました。死因は老衰。満88歳でした。自宅は同市羽衣町8ノ9。喪主は養嗣子の誠一郎さん。ご家族によると、7月まではほ



毎日の散歩を欠かさず、食欲も旺盛だったが、その後の猛暑で熱中症にかかった模様で、拒食症状に。医師からは入院を強く勧められたが、本人は頑なに在宅治療を希望し、点滴などを受けていた。しかし、回復はままならず、8月25日、病院に収容。抗生剤の投与や酸素吸入などの措置がとられたが、10月に入って昏睡状態に陥り、5日未明、息を引き取つ

### <住吉仙也さんの略歴>

- 1926年 10月22日、京都市生まれ
- 1950年 大阪大学医学部入学、山岳会入会
- 1954年 大阪大学医学部卒業
- 1955年 医師国家試験に合格。その後、神戸医大、川崎病院、阪大整形外科、豊中市民病院、小豆島・内海病院に勤務

### <海外での主な登山歴>

- 1959年 日本山岳会ヒマルチュリ遠征隊に参加
- 1961年 阪大山岳会P 29 第1次遠征隊に参加
- 1969年 阪大山岳会P 29 第3次遠征隊隊長
- 1970年 日本山岳会エベレスト登山隊に参加
- 1970年 阪大山岳会P 29 第4次遠征隊登攀隊長、初登頂に成功
- 1973年 第2次RCCエベレスト南西壁登山隊参加
- 1976年 山学同志会ジャヌー登山隊に参加
- 1983年 登山溪流会ナンガルバット登山隊に参加
- 1993年 群馬県岳連チョーオユー、エベレスト南西壁登山隊に参加

このほか、ネパールヒマラヤ、中国ボコタ峰、白頭山などを彷徨。

独特の長いあごひげから、山岳関係者や現地シェルパには「ヒゲのドクター」の愛称で親しまれた。

たとされます。  
住吉さんは1961年から10年間に及んだP 29峰遠征の第1次、第3次、第4次隊に参加。1970年の4次隊では登攀隊長として初登頂を成功させました。登頂時には、下山

中に滑落死した渡部洋隊員とシエルパのハクパ・ツエリンの動きを第3キャンプから望遠鏡を通して撮影、登頂の証拠写真としました。

住吉さんの海外登山歴は1959年の日本山岳会ヒマルチュリ遠征隊参加が最初。P29峰のほかエベレストへ3回も出かけるなど数多くのヒマラヤ遠征隊に医師兼隊員として参加し、70歳を過ぎてからも西北ネパールなどを歩いておられました。

## 東西で「お別れの会」

住吉さんの死去を悼む「お別れの会」が昨年12月3日、大阪・梅田の大東洋で開かれ、本会をはじめ、日本山岳会関西支部、大阪府山岳連盟などから64人が出席しました。

幹事役の重廣恒夫・前日本山岳会関西支部長の司会で始まり、まず發起人を代表して本会の大野義照会長が挨拶。続いて生玉道雄、田辺壽、国井治各氏の追悼の言葉があり、P29峰第3次、第4次遠征隊に参加した本会の田中喜樹氏がエピソードを交えて別れの挨拶をしました。

その後、1970年の日本山岳会エベレスト登山隊に同行した平林克敏氏の献杯で懇談に移り、懇談の後、住吉さんを信奉する大阪市大山岳会の和田城志氏の別れの言葉に続

いて、喪主の住吉誠一郎氏の挨拶でお開きとなりました。

本会の出席者は次のみなさん。

(順不同)

大野義照会長、丸山庄司夫妻、石浜高明、石原敏雄、打出英樹、大川和秋、大宅幸夫、木村裕一、黒岩芳夫、黒田治朗、甲田吉彦、大工原恭、高田邦雄、田中喜樹、豊坂昭弘、廣瀬貞雄、三澤日出夫、山田靖則

これに先立って、東京では日本山岳協会の八木原啓明会長を代表発起人とする「お別れの会」が11月25日に開催され、本会からは宮本貞雄、野田憲一郎、田中喜樹の3氏が出席しました。



開会の挨拶をする大野会長

# 住吉さんを悼む

## P29、阪神大震災に思う

会長 大野 義照

住吉さんと親しく話せるようになったのは1970年秋の第4次P29隊に参加してからだ。同年春は日本山岳会エベレスト隊に参加されており、遠征の準備中にじっくり話す機会はなかった。ブリガンダキ沿い

に進む21日間のキャラバン中、同じテントで、船医として外国へ行かれた時の話や、ヒマラヤを越える鶴やアポロ蝶、青いケシのことなど、登山以外のことでもいろんな話を聞かせていただいた。お酒が大好きで、人の往来が少ないブリガンダキのルートは、街道筋によくある茶店がないので、民家でロキシー（焼酎）を買い求め、ご相伴させていただいた。

P29峰は渡部洋隊員とシエルパのハクパ・ツエリンが登頂したが、2人は下山中に滑落死した。登頂の確認は住吉さんがC3から望遠鏡を通して撮った写真でなされた。私は前日、C5まで2人を送ってC3へ下り、住吉さんのそばにいた。望遠鏡

の接眼レンズに一眼レフのレンズを接触させ、シャッタースピードも絞りも勘で設定して撮影された。住吉さん自身もうまく撮れているか半信半疑だったが、写真はアサヒグラフが大きく取り上げ、三島由紀夫事件がなければ表紙になっていたそう。結局、登頂は認められたが、お酒が入ると「もう一度行こう」とよく言われた。

1995年の阪神淡路大震災では夙川のご自宅が被災した。当日中に無事は確認できたが、翌日訪ねて驚いた。2階部分が道路側に崩れ落ち、1階は大きく傾いていた。寝ていた部屋の梁が枕元に落ちたが、半身を起こして朝刊を読んでいたため無事であった。地震4日後の土曜日、現役部員3人を連れて、崩れた2階の整理に行った。その後も「ここはヒマラヤのベースキャンプより快適だ」と住み続けられ、見舞いに来た人たちと毎夜のように宴会を開かれていた。しかし、市の勧告を受けて退去され、現在の家が建てられた。

住吉さんが起居されていた部屋は東側は夙川に面し、ガラス戸越しに堤の松並木が眺められた。晩年はこ

の堤を1時間ほど散歩するのが日課だった。南側には隣家との間に庭がそのまま残り、朝夕まかれるえさに数十羽のスズメが集まっていた。この庭に向かって座り、掘りごたつ式のテーブルで食事から原稿書きまですべてをこなされていた。

高所順化、酸素の取り方など高所医学の面でもヒマラヤ登山に大きく貢献された。山、海、人を含めて動物、植物などいろんなことに興味を持たれ、そして、何事にも動じず、自由に生きられた大先輩だった。

## 剣道めきらめく山男に

大島 輝夫

住吉さんは阪急夙川駅の近くで内科医院を開いておられた父勤也氏の下で育ち、西宮市の甲陽中学から岡山市の旧制六高に進んだ。中学、高校とも剣道部に所属し、長身の体格からみて強かったと思われるが、敗戦とともに、進駐軍は剣道、柔道を軍国主義の象徴として禁止した。一生のよりどころとしていた剣道が禁止され、これが住吉さんの人生の転機となる。

1947年春、六高を卒業したころから上高地に入り、冬は帝国ホテルの番小屋に泊めてもらい、3年間、穂高などを歩き回った。やがて、こ

の「山岳浪人」から足を洗って父の後を継ぐべく、猛勉強のすえ、阪大医学部に入學した。そして第2期1ーダで医学部先輩の家田千尋君に勧められて阪大山岳会に入会した。

最初のヒマラヤ行はマナスル三山最南のヒマルチュリ(7,893m)だった。日本山岳会の村木潤次郎隊長が大阪に来てクライマー兼医師の推薦を求められた。他にも候補者はいたが、篠田軍治先生や徳永篤司君らの推薦で住吉さんに決まった。

この隊は1959年4月に登攀を開始。住吉さんは第6キャンプ(7,150m)建設までサポートするが、結局、登頂は断念を迫られた。この間、すぐ隣にそびえるP29峰をじっくり観察し、阪大山岳会による登頂に向けて決意を固めたと思われる。ヒマルチュリはその後、慶応大隊が登頂した。

阪大卒業後は船医として世界各地を回り、小豆島の病院勤務中は町民の信頼を集めた。また、1975年の沖縄海洋博の際には、南洋諸島のヤップ島付近の島から現地人がカナで沖縄まで航海する企画に協力、ヨットで伴走したこともあった。

登山家として医師として優れ、教養豊かな文化人であり、探検心にあふれた住吉さんの逝去を謹んでお悔やみ申し上げます。

## 自由に生きた大先輩

大工原 恭

住吉さんに初めてお会いしたのは第1次P29遠征隊の準備が始まった時だから、1960年秋だったと思う。あの年配としては背が高く、すらっとした方が中之島の医学部記念館にあった遠征隊準備室にいきなり入ってこられ、徳永篤司さんにもずけずけとものを言われるのには驚いた。この遠征は阪大として初めてのことで、何をどう進めたらよいか分からぬことばかりだったが、時折現れる住吉さんに尋ねると、すぐに答えが返ってくるので、次第に住吉さんに頼るようになった。

第1次遠征隊が帰国した後、山岳部同期の私達10人ほどが中心になって「ヒマラヤ研究会」をつくった。

住吉さんはその顧問格で、いろいろな資料を集めて来られ、夙川のお宅に伺ったりした。三宮商店街の何かの店に呼ばれることもあり、行ってみると、その2階で旦那然とあぐらをかいて座り、店の主人らしい女性がお茶を出してくれることもあって、なんとまあ自由に暮らす先輩だと感じ入ったものであった。

第3次遠征隊の準備は1968年11月、住吉さんが歯学部を私を

訪ねて来られた時から始まった。1964年から続くネパールの登山禁止令が解けるらしいことをどこからか聞いてこられ、「お前はすぐに申請書を作れ」と言われたのである。私はその夜すぐ、タイプをたたいて翌年ポストモンスーンの申請書を作り、翌日には住吉さんのサインをもってネパール政府に送った。登山許可の申請書だから、当然、会長の篠田軍治先生のサインでないといけないが、住吉さんは「篠田先生の了解はわしが取る。急ぐからこれでよい」とのこと。この時も住吉さんの自由なものの考えに感服したものであった。

この3次隊は隊員選考も篠田先生から一任され、住吉さんが文字通り、バラサブであった。私も隊員に加えて頂いたが、ヒマラヤはもちろん海外も初めての我々が右往左往するのをしつかりまとめられた。キャラバン中のテントに押しかけてくる現地の患者は黒田治朗君に押しつけ、食料係の田中喜樹君や甲田吉彦君が走り回って手に入れてきたロキシシーやチャンをテントの中で悠然と飲んでおられた。

第4次遠征隊については「30代の若い隊長で行くべし」と言い残して、1970年プレの日本山岳会エベレスト隊に行ってしまった。準備は

水野祥太郎先生に隊長をお願いして若い者で進めたが、結局、エベレストから帰った住吉さんに登攀隊長を引き受けて頂くことになった。3次隊副隊長だった玉井康雄君は「住吉さんは、この第三次P二九隊、エベレスト隊、第四次P二九隊と三シーズン続いて遠征に加わった。いかにタフで、いかに社会通念からかけ離れた人であるか」と書き残している（P-29報告書）。まさにその通りだったと思う。ご冥福をお祈りする。

(1963年歯学部卒)

## 今でも寂しく思う

田中 喜樹

昨年10月に亡くなられて、今でも寂しい思いをしています。夙川のご自宅に電話すると、「今、どこや」が口癖でした。それも大きな声で。耳が遠くなってきたのでしょうか。

昨年3月、広島への出張の帰りにご自宅に寄りました。「よう阪大でP29に行ってくれた。みんなでああ」。何度も何度も繰り返すので、私はボケてきたのかな？と感じました。でも、言っていることはまともでした。体力はかなり弱っていて、高知の生玉道雄さん（禅寺の住職）からいただいた山吹の苗木の移植もしていなかったので、庭に穴を掘っ

て植えました。大変感謝されましたが、何でもこんなことが出来ないのか

不思議でした。

9月29日入院先の上ヶ原病院を

## 住吉さんの国内山行記録

年	月日(自)	月日(至)	山域	山行形態	備考	時報	
1950	8月12日	8月18日	槍ヶ岳-常念岳-大滝山	個人山行	単独	時報3号	
		12月30日	杓子岳双子尾根	冬山合宿	第二隊	〃	
1951	7月18日	8月1日	鹿島槍カクネ里	夏山合宿		〃	
		9月21日	9月30日	北岳バットレス	秋山山行		時報4号
		12月25日	1月8日	北岳	冬山合宿		〃
1952	9月29日	10月5日	八ヶ岳	秋山山行		時報5号	
1953	3月17日	3月21日	後立山逆縦走大沢偵察	偵察山行		〃	
		3月23日	4月7日	後立山逆縦走	春山合宿	縦走隊	〃
		12月25日	1月10日	穂高岳-槍ヶ岳	冬山合宿	サポート隊	時報6号
1954	10月12日	10月22日	第二次黒部下廊下偵察	偵察山行	OB参加	時報7号	
		11月20日	11月25日	八ヶ岳	個人山行	OB参加	〃

見舞いました。病室に行き、「田中です！」と大声で名乗りました。「おお」とわかっていただいたようです。その時は声がかすっていて、宙に指で字を書いて何か伝えようとしていたようですが、よくわかりませんでした。「これはもうあかん」と思って、病院を出て関係者に電話しました。涙が止まりませんでした。皆さんには多分、「あと1週間ぐらいや」と連絡したと覚えています。そして、きつちり1週間後の10月5日に未知の国に旅立たれました。言葉？の羅列をします。意味不明のものもあるかもしれませんが、先輩と私の会話の中での思い出です。

タン 竹田寛治 石坂昭二郎 村木 潤次郎 直立不動 田辺壽 芳野満彦 甚六 セブン あこや亭 ミカド 美之 司葉子 久保菜穂子 暑苦しい女はいらん チツチャイ細い子がエエ 息子を養子にくれ 意外にロマンチスト ヒマラヤの花と蝶厚かましくズボラな奴 鶴の群舞 やるだけ戦った 成否を何かあげたらう

先輩、たくさんのおい出ありがとうございます。ごさいました。

(1973年工学部卒)

## 韓国での思い出をい

石浜 高明

1987年(ソウルオリピックの前身)、小生は転職して伊藤忠商事傘下のコンピュータソフトの開発・販売会社に勤務していました。当時、韓国のエンジニアリング会社と合併で同様な会社を設立するためにソウルに駐在しておりました。

折しも、住吉さんは韓国山岳会の重鎮で大学教授のソン氏と親交があり、韓国山岳会で高所医学の講演をするため、度々、訪韓される機会がありました。訪韓時にはその都度、車で空港まで送迎しておりました。小生も休暇をとり、日本語を話す機会がない毎日解放され、片言の

ハンゲルを駆使し、たつぷり住吉さんとお付き合いさせていただきまし  
た。そのソーン氏に居酒屋を紹介され、  
たびたび飲食を共にする機会にも恵  
まれました。

その店のおかみさんは慢性的に腰  
痛に苦しんでおり、住吉さんは、治  
療に必要な器具まで持参して面倒を  
みておられ、大変感謝されていまし  
た。おかみさんも気風の良い人で、  
飲食代は無料であるばかりでなく、  
市内観光に特別なかわいいガイドを

手配してくれたこともありました。  
酒好きの住吉さんは大変ご満悦のよ  
うでした。

鉄人のようだった住吉さんが逝去  
されたなんて、今でも信じられませ  
ん。公私にわたり大変お世話になら  
ると同時に、楽しい思い出、誠にあり  
がとうございました。

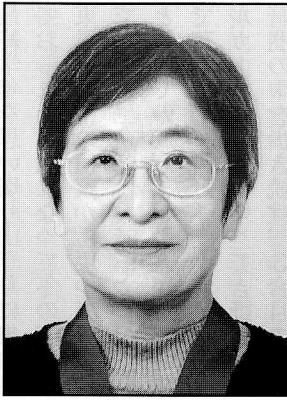
He is surviving in my mind!  
Good-Byell

(1966年工学部卒)

## 三枝礼子さんも死去

(前号で一部既報)

本会会員の三枝礼子(さいぐさ・  
れいこ)さんが昨年5月18日、心筋  
梗塞のため、大阪府交野市の自宅で



亡くなりました。82歳でした。山岳  
部女子部員の草分けで、ヒマラヤ遠

征で訪れたのをきっかけにネパール  
との交流を深め、独力で「ネパール  
語辞典」2巻を完成させるなど努力  
と根性の人でし  
た。

山岳部時代は男  
子部員に交じって  
山行を続け、卒業  
後も現役女子部員  
の仙丈ヶ岳冬山合  
宿を牽引されまし  
た。また、第3次、  
第4次P29峰遠征  
隊に参加したあと  
も何度もネパール

を訪ねて現地の人らと交流を重ねら  
れました。

そして1997年には8年がか  
りで編さんした「ネパール語一日  
本語辞典」を出版。日本山岳会の  
第1回秩父宮記念山岳賞を受賞し、  
2000年4月にはネパール国王か  
ら勲章を授与されました。2006  
年にはさらに「日本語・ネパール語  
辞典」も出版されました。

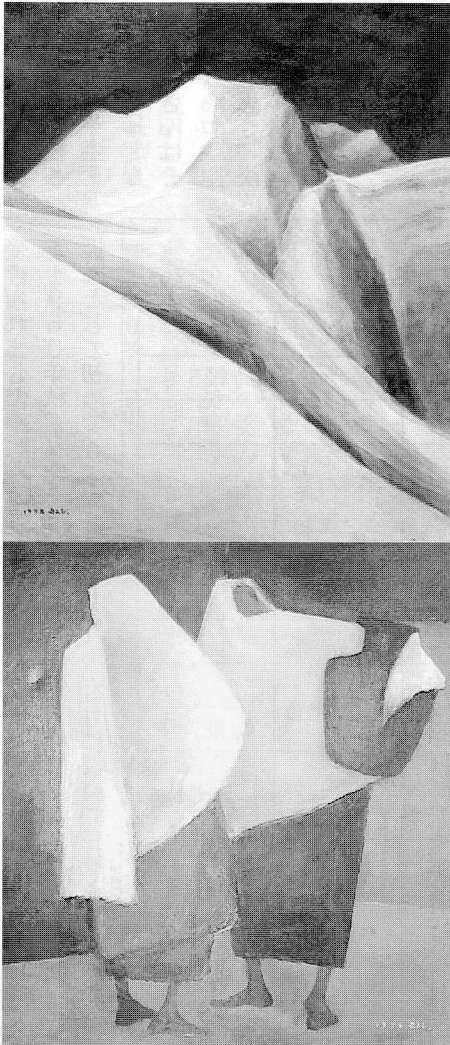
1955年薬学部卒。卒業後は製  
薬会社のエーザイに勤め、英語やド  
イツ語の文献翻訳などに従事した  
が、30歳代半ばで退職。難関校の東  
京芸術大学美術学部に入學し、絵画  
の勉強に本格的に取り組みられまし  
た。この難関突破も3度目の挑戦で  
合格したもので、三枝さんのお人柄  
を物語るものです。

岡田 博司

## あのころの三枝先輩

1954年4月早々、新入生の私  
は、中之島にあった山岳部室を訪ね  
た。宍戸元リーダーが迎えてくれ、  
4月下旬某日、道場の百丈河原で新  
人歓迎キャンプをするから、大阪駅  
の福知山線ホームに集まるようにと  
のこと。だが、当日は私鉄の春闘ス  
トで、集まったのは TENT を背負つ  
た宍戸リーダーと私だけだった。

そんな山岳部生活の始まりだった  
が、夏までにだんだん上級生の知己  
を得て、迎えた夏山合宿では、いち  
ばん長い縦走をやりたくて山本進一  
リーダー、三枝礼子サブリーダー  
の八方尾根から槍ヶ岳のパーティー  
に加えてもらった。



三枝さんの作品。P 29(上) とネパールの女性

三枝さんは薬学部で4回生で、就職のめどもついておられた様子で、最終学年を思い切り山登りに集中しておられた。秋になって冬の鹿島槍東尾根合宿の偵察から戻ってこられて「合間に大峰山に登っておきたい」と誘っていたとき、数人が阿部野橋で落ち合い、吉野へ向かう。ケーブルカーの最終便に乗って吉野口から暗闇の中を歩き続け、3合目の茶屋で仮眠をとり、山上ヶ岳を目指した。途中、女人結界の碑も目に入らず、人に出会うこともなく、頂上からは川上村柏木へ下山した。12月も中頃の小雪がちらつくこの季節、山の神様は、山を心から愛する女性を喜んで迎えてくれたと思う。

年が明け、黒部川下廊下横断計画が大きく動き出した。私も新人も総動員で歩荷の主力部隊として参加してきた。三枝さんも現役最後の山行として大出から大沢までの2往復、新越尾根のラッセルをうれしそうにされていた。しかし、3月も残り少なくなつたので、新越乗越の雪洞を出て山を下り、東京の就職先の入社式に向かわれた。

それにしても、あのころの登山をとりまく気分は何だったんだろう。1950年、フランス隊によるアンナプルナ登頂のニュースが世界を駆けめぐり、私も『処女峰アンナプル

ナ』を夢中で読んだが、そのことを誰にも口にしなかった。もし三枝さんの胸中にヒマラヤへの夢が芽生えていたとしても、やはり口にしなかっただろう。聡明な三枝さんはそのではなく、身近なことからコツコツと取り組んでゆかれたと思う。決して夢を失うことなく。

(1958年法学部卒)

### 般若心経をネパール語で

宗實 慶子

私の家から近い住吉仙也さん宅の玄関には、三枝礼子さんが描いたF10号の油絵が架かっています。ヒマラヤのクレパスの中で白とブルーに光る水を力強く描かれ、「1971 sat」とサインがあります。訪問の度に扉を開けると「あつて然り」と私は微笑んだものです。P29登山では二度も一緒だったお二人ですが、あつという間に天国で再会されて……。

三枝さんは8年余りかけて1997年秋に「ネパール語辞典」を出版なさいました。この業績によって翌年の日本山岳会の年次晩餐会で第1回「秩父宮記念山岳賞」をお受けになりました。私も出席していましたが、舞台の上での鏡開きには同時に受賞された薬師義美さんも参加され、皇太子様、雅子様のお手を

### 三枝礼子さん国内山行記録

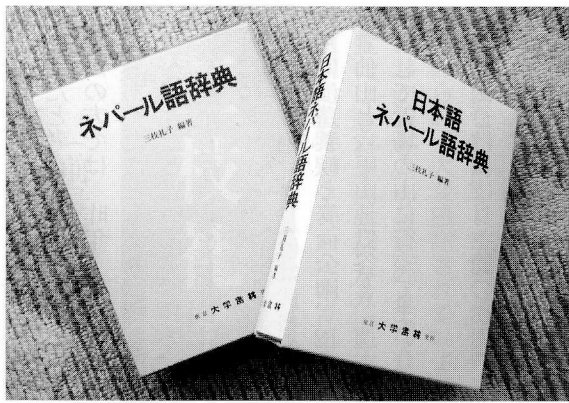
年	月日(自)	月日(至)	山域	山行形態	備考	時報
1952	7月28日	8月2日	針ノ木峠-五色-立山温泉	夏山山行		時報5号
	10月10日	10月13日	雪彦山	岩登りトレ		
	12月23日	12月31日	細野スキー合宿	冬山合宿		
1953	3月18日	3月24日	志賀高原スキー	個人山行		
	7月19日	7月29日	劔岳	夏山合宿		時報6号
	7月31日	8月5日	劔-穂高縦走	夏山山行		
1954	11月1日	11月7日	穂高冬山偵察	秋山合宿		
	3月27日	4月5日	黒部下廊下偵察	春山合宿		
	7月20日	7月28日	南股	夏山合宿		時報7号
	7月30日	8月6日	後立山縦走(唐松-烏帽子)	夏山山行		
	11月22日	11月25日	鹿島槍東尾根偵察	偵察山行		
1955	12月25日	1月2日	鹿島槍東尾根	冬山合宿		
	1月15日	1月16日	越畑スキー	個人山行		
	3月20日	3月27日	黒部下廊下	春山合宿		
1956	1月1日	1月3日	富士山	冬山山行	OB参加	時報8号
1957	12月30日	1月5日	仙丈ヶ岳	冬山合宿	OB参加	時報9号

受けられました。1960年秋、私たちは日本人女性隊として初めて、ヒマラヤのデオ・

テイバ峰(6,001m)の登頂に成功しました。その後、2012年11月になって三枝さんが、この隊に

参加した原欣子さんのお墓に参りた  
いと言われました。

折よくアメリカから帰国された、  
同隊で一緒にいた杉浦耀子さん、  
東京の山口節子さんが段取りをして



くださいまして4人で大阪市天王寺  
区の一心寺（お骨仏の寺）に参りま  
した。大勢の人の遺骨で造られた阿  
弥陀如来像の前で、三枝さんはなん  
と般若心経をネパール語で唱えられ  
ました。欣子さんは目を白黒されて  
喜ばれたことでしょう。

その夜、ホテルで、亡くなった久  
保三朗さんのことやネパール語辞典  
に話が及び、「ネパール語辞典は海  
賊版が出回っているが、多くの方が  
利用してくれるのなら…」とおっし

やっています。

山のお友達が欠けてゆくのが寂し

い近頃であります。

(日本山岳会関西支部会員)

## 関東勢抑えて3位入賞

### 全日本大学クライミング

阪大山岳部主将 岩本 亮太

昨年9月に明治大学で開かれた全  
日本大学スポーツクライミング対校  
選手権について報告します。

昨年4月ごろ、山岳部の部員も増  
加し、新しい部の活性化を模索して  
いたころ、私の目に留まったのがこ  
の対校選手権です。クライミングの  
大会は個人競技が一般的ですが、こ  
の大会は特殊で、大学ごとに4人1  
チームで競うものです。これまで多  
くの大会に出場してきた私は、仲間  
たちと共通の目標を作り、達成に向  
かって皆で努力することができたら  
どんなに楽しいだろう、他の部員に  
もクライミング競技会の魅力を知っ  
てもらいたいと思います、この大会への  
参加を決意しました。

試合の競技形式について説明しま  
す。ボルダリング種目は高さ4層ほ  
どの壁に設定された4つのルートを  
制限時間内に4人で、いかに多くの  
ルートを少ない回数で登れるかを競

う競技です。この競技形式の最大の  
特徴は、チーム内であれば登ってい  
る仲間へのアドバイスや事前に登り  
方を教えることが可能だということ  
です。ですから、この大会で勝つに  
はチームワークが何よりも重要にな  
ります。

大会への出場が決定してからは阪

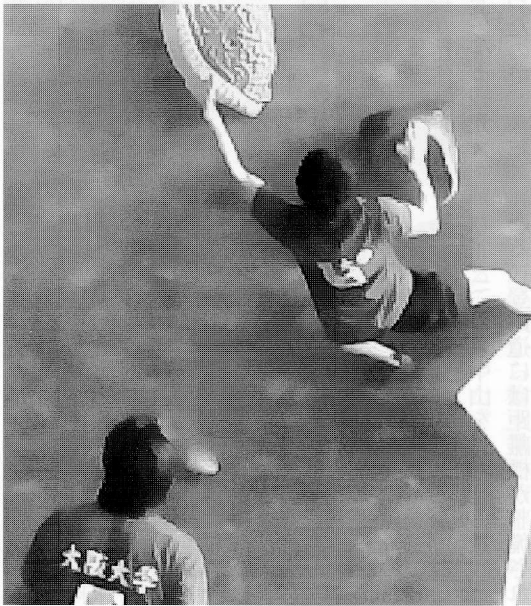
大ウォールや民間の  
クライミングジムで  
競技形式に則した実  
践的な合同練習を行  
い、勝つための戦略  
を皆で立てるなど、  
競技力向上に努めま  
した。それらの努力  
が功を奏してか、関  
東の強豪校を抑え、  
神がかり的に3位に  
入賞することができ  
ました。

今回のこの結果は

メンバー全員の勝利への強い執着心  
とクライミングへの情熱、そして大  
会前日に壮行会を開いてくださったり、  
当日も応援に駆けつけてくださったるな  
ど、OBの皆様の様々な形でのご支  
援によって実現したものだと思いま  
す。

現在、スポーツクライミングは東  
京オリンピックの追加種目候補に挙  
がっており、最も注目されているス  
ポーツの一つです。その中でこの今  
年の大会での3位入賞は山岳部のこれ  
からの活動の新たな可能性を切り拓  
くことができましたように思います。  
これからも山岳部のさらなる活性化  
を目指し活動を続けていきます。

(理学部3年生)



# OBの支援に感謝

阪大山岳部前主務 塚田 信司

昨年度の活動報告をいたします。まずクライミングの方は主将の岩本の報告にある通り、全日本大学スポーツクライミング対校選手権のポルダリング団体戦で見事3位を勝ち取ることができました。今後もクライミングに力を入れ、新入部員を獲得していくためにも満足のいく結果であったと考えております。

登山の方では、昨年、新入部員が9人もあったこともあり、積極的な山行ができたと思います。具体的には新人歓迎山行で大文字山と中山、5月にはダイヤモンドトレイル、6月には摩耶山、7月には武奈ヶ岳、11月には蓬萊峡と箕面公園、12月には霊仙山と六甲山地獄谷と、週末を利用して近場の山に行つてまいりました。

定例山行はほぼ月1回のペースで行つており、その都度、担当の部員が計画を立てています。昨年度は部員が増えたため、1人が複数の山行を企画することが減り、部員の負担が軽減しました。そして1回当たりの参加者は増加したように感じました。

また、昨年度はOBの方々が大変お世話になったことが印象に残っております。クライミング大会前日に開いてくださった壮行会をはじめ、何度も食事会を開いてくださり、その度にかつての山岳部のお話を聞いたり、我々の活動状況を報告したりすることで部員のモチベーションの向上につながりました。新年度も交流を深めて参りたいと思っておりますので、どうぞよろしく願ひいたします。



摩耶山頂で

昨年度、阪大山岳部は大きく飛躍したと思います。これもOBの方々のご尽力のおかげです。そのことに感謝しつつ、今後も山岳部を盛り上げて参りますので、引き続き応援のほどよろしく願ひいたします。

(薬学部3回生)

## 香港第2峰に登った

山田 靖則

毎年正月明けに、長女が住む香港に行くこと12回。名だたる観光スポットはほとんど行ったので、今年 は国際空港やデイズニーランドのある南大嶼(ランタウ)島にある香港第2峰の鳳凰山(934m)に長女夫妻と登ることにした。香港は自然

が多く、その散策路でもあるトレイルが整備されており、ランタウ島にもランタウトレイルが第1段から第4段まである。鳳凰山へのルートはこのうち第3段である。

1月10日、北角(ノースポイント)の宿泊ホテルに7時集合。近くの飲茶屋で朝食を摂った後、地下鉄で最寄り駅の東涌(トンチョン)へ。たまたま、この日は昂坪(ゴンピン)チャリティートレイル2016の開催日で、駅前にはハイキング姿の群衆でどうなることかと思つたが、予定した登山口へ向かう人は少ないよう

で一安心。香港はタクシーが安いので登山口までタクシーを利用しようとしたが、なかなか来ず、登山口(伯公坳、340m)に着いたのは9時50分。直ちに登り始める。登山口はこのチャリティートレイルの給水所となつていた。

天気はあまり良くなく、山の上の方は雲がかかっている。いきなりの喬木帯の急登を登り切ると平らな道になり、東涌の高層マンションが霞んで望まれる。やがて灌木帯となり、どこか六甲山を思わせる景観となる。登山道には距離標が整備されているが、始終点が分らないので道が間違っていないという目安にしかない。

トレイルが主尾根上に達すると、南からの10時を超えるかという強風に霧が飛ばされてきて、視界は悪く、体感温度も下がり、コンディションは雨がただけましといった状況になった。それでも、日本と同様に中年の御婦人の方のパーティーや老若とりませた登山者、さらにはチャリティートレイルの参加者が走るように登って行く。大方の登山者はジャージーに短パンといった軽装である。案内表示も要所にあるため、たかをくくって登って行くと、風はますます強くなり、長女夫妻が遅れ始めた。強風を避ける場所もほとん



どなく、風の弱い場所で数分立ち止まる程度の休憩だ。半分近くが自然石の石段の急な道を登り、11時30分山頂に達した。

晴れていれば香港国際空港を眼下に360度の景色を堪能できるはずが、霧で全く視界はなく、長居は無用と早々に下山にかかる。下りは上り以上に急傾斜の石段で、500m付近の喬木帯のなだらかな道に出る



まで続いていった。膝に負担がかかるのでスピードは出さず、下山点である「心経簡林（般若心経が刻まれた大木の柱が∞＝無限大の形状に立てられたパワースポット）」まで1時間半を要した。合計3時間強、ほぼ想定通りだった。そこから観光スポットである天壇大仏と寶蓮寺のある昂坪へ出、ロープウェイよりもはるかに安いバスで東涌へ戻った。ちなみに先に述べたチャリテイトレ

イルのうち、この鳳凰山の登降を含む23キロコースの第1位は2時間35分というので驚きであった。

なお、香港最高峰は九龍半島新界にある大帽山（957m）であるが、こちらは山頂まで自動車道が通じており、登るだけでは面白くないという。（1971年工学部卒）

## 千曲・信濃川を源流から夏の「自転車ひとり旅」

糸井 文彦

2014年8月の「ツール・ド・フォッサマグナ」に続く昨年夏の「自転車ひとり旅」は「ツール・ド・千曲川&信濃川」にチャレンジし、源流（長野県南佐久郡川上村梓山）から河口（新潟市）まで約330キロを4日間かけて完走しました。

◇ 8/17 スタート地点の千曲川源流最奥集落、梓山（標高1,309m）へJR小海線と村営バスを乗り継いで到着。雨が降りしきっていた。投宿した白木屋旅館は明治9年創業で、佐藤春夫、尾崎喜八、深田久弥らも滞在した由緒ある宿。自転車は事前に送っておいた。

8/18 朝4時に目を覚まして外を見ると、空は明るい。6時に出発し、西へ信濃川上駅方面へ向かう。

この辺りは高原野菜の一大産地で、一面の野菜畑と周囲の山の緑と空の青さの中を爽快な気分で行く。信濃川上駅の先で道路は千曲川を離れて野辺山台地に登っていく。あえぎながらの登りの途中、驟雨とともに前方に虹が！ これからの長旅の前途を祝福するような現象だった。

台地への急登を終えると道は佐久甲州街道（国道141号）に合流し、一路、北の佐久平方面へ向かう。時々、右眼下に千曲川の雄大な流れを見ながらの走りが続く。途中、小

海線青沼駅付近から道を東へそれて友人の実家へ寄り道。谷の奥にある代々続く農家を訪問し、ご両親としばし歓談。田舎暮らしの厳しさなどを聞くことが出来た。

街道に戻って通過した佐久市の中心部は新幹線駅の開業でごく普通の



町と化してしまつて幻滅の一語。小諸駅前も新幹線の影響で人の姿も少なく、寂しい場所になっていた。さらに西へ向かつて着いた上田駅前には小諸と打って変わって新幹線駅開業で非常に賑やか。せつかくの機会なので、多くの知人、友人が卒業した名門上田高校に寄つて校門周りを見学。さらに西へ向かつてJR西上田駅近くの友人宅に泊めて頂いた。

▽走行時間・約10時間（食事など休憩含む）、走行距離・約90キロ

8/19 6時出発。国道18号を一路、長野市へ。約3時間で長野市に到着。川中島から犀川を渡るあたりの広大な眺めに目を奪われ、つい足を止めてしまふ。ここから先は飯山市を目指すところだが、道を東にとつて須坂市へ。目指したのは同市井上にある浄蓮寺。そんなところへなぜ？と言えば、作家でドイツ文学者の中野孝次さんの墓があるから。寺を探するのに苦労し、着いた後も墓を見つけるのに苦労したが、何とかお参りすることが出来た。眼下に長野盆地を見渡す素敵な場所であった。

この日は宿を飯山市に予定していたので、小布施町、中野市を経由して国道117号を北へ向かう。千曲川を渡る橋からは川幅いっぱい水を湛えた雄大な流れが見え、ひたす

ら眺め続けていた気分になる。午後後も後半になってJR飯山駅着。こゝも新幹線駅開業で駅前風景が激変していた。飯山駅の一つ先の北飯山駅近くのホテルに投宿。

▽走行時間：約11時間、走行距離・約75キロ

8/20 4時に起きて町を散策したあと、6時に出発。地図には長野、新潟県境手前に幾つかのトンネル記号があるので、それを気にしながら田園風景の中を走る。高低差の大きな橋は3日目を迎えた体に負荷が大きさい。やがて県境地域に差しかかるが、懸念していたトンネルは意外に幅が広く、歩道も設けられていて、問題なく通過できた。

約3時間弱で県境の森宮野原駅を通過して新潟県に突入。ちなみに、この駅は駅での日本最高積雪記録地点(1945年2月20日、7.85メートル)とかで標柱もある。新潟県に入ってから越後平野をひたすら進む単調な道。途中、小千谷駅前の食堂で食べた名産「へぎ蕎麦」がまことに美味で、疲れを癒してくれた。長岡駅に到着し、駅前のホテルに投宿。

▽走行時間：約10時間、走行距離・約100キロ

8/21 いよいよ最終目標の新潟市を目指す日。定刻6時に出発した。4日目を迎えて体の各所が痛み出す

中、一刻も早く目的地に着いて祝杯を上げたい一心で進む。大型トラックがすぐ横をガンガン飛ばしていく平坦な道(国道8号)で、全く面白くない。今回のようなテーマがなければわざわざ走る動機は見出せそうもない。「忍」の一字で耐えて正午過ぎ、新潟駅に到着。その後、信濃川河口の萬代橋(新潟市のシンボル、重文)を訪れて旅の終着点とした。

▽走行時間：約6.5時間、走行距離・約65キロ

## 「塩の道」トレッキング

横尾 秀次郎

去年の夏、対岳館での白馬集会のあと、梅池高原の松沢口から出発し、平岩で姫川を渡り、大網峠を越えて糸魚川へ抜ける旧道、千国街道(塩の道)を歩きました。35キロ、1泊2日のトレッキングです。平岩までは道標も分かりやすく、道も良く、地元で面倒を見ていることが分かり、とても楽しく歩きました。コース案内は小谷村観光公式サイトにあるのでご覧ください。

現役のところ、千国のわら苺きの猪俣善衛さん宅から「鐘の鳴る丘」を越えて神の田圃まで何度も歩きましたが、50年前の記憶は戻ってきませ

ん。特に、昔は「近い」と思ったのが、こんなにあったのか、という距離感の差を感じました。

平岩までは姫川の左岸を河原からの高度約100メートルに沿って古い集落の和平、虫尾などを結ぶ小道が続きます。標識は整備され、道も除草されていて迷うことはありません。やがて右岸に渡って大網集落からは山岳コースです。100メートル下り、これから沢沿いの急な登りになり、これが街道?という道が続きます。高度差500メートルを登ると大網峠で、新潟県境はすぐです。山口宿まで下り、バスで糸魚川に出て新幹線で東京に戻りました。

特記すべきは、途中で1泊した来馬(くるま)温泉風吹荘です。元は村営でしたが、今は若い夫婦でやっています。2リットルパイプから24時間温泉が勢いよく浴槽に注がれており、百に一つのすばらしい湯です。

夕食の献立を書いておきます。スズキの造り、ジュンサイ、鶏の煮物、カボチャの箸休め、鯛のかぶと煮、ウナギ入り焼き込みご飯、鹿のステーキ、打ちたてそば、ピーマン、トマト、ゴーヤの天ぷら。とても根性があります。

もう夏も終りのところで、この素晴らしい山路を行く人は少なく、2日の間、山道では誰とも出会いません

でした。2日間、この道を一人で独占了んだという嬉しさが心を掠めた山行でした。

何年前か、やはり対岳館から姫川を溯り、分水嶺を越えて青木湖、木崎湖を経て信濃大町まで歩きました。この道も心が晴れる楽しいコースです。(1964年工学部卒)

## 現役部員6人が参加

### 2016年新年会

2016年新年会は2月13日午後、阪大中之島センターで開きました。会員の参加者は10人と予想外のさびしさでしたが、現役部員が6人も出席したのが注目されました。

大野義照会長の開会あいさつのもと、死去した住吉仙也氏の冥福を祈って黙とう。歓談の途中、岩本亮太山岳部主将から、3位に入賞した昨年9月の第2回全日本大学スポーツクライミング対校選手権大会の報告があり、スライド写真で大会の様子が紹介されました。

続いて大野会長、山田靖則常務理事からもP29遠征隊の記録や香港第2峰登山などの報告がやはりスライド写真で紹介されました。最後に大阪の会合は初参加の上松一雄氏(1975年工学部卒)が自己紹介

のあいさつをしました。

参加者は次のみなさん。(順不同)

大野義照、木村裕一、岡田博司、  
打出英樹、大川和秋、豊坂昭弘、高  
田邦雄、山田靖則、上松一雄、森藤  
正人

「山岳部」山崎優太、岩本亮太、  
大上毅彦、杉島大海、染井駿太、谷  
井脩一郎

## 三枝さん追悼をかねて

### 2015年白馬集会

2015年度白馬集会在8月22日  
から長野県白馬村八方の「ホテル  
対岳館」(丸山徹也館主)で開かれ、  
会員14人が参加した。

三枝礼子さんを偲ぶ会を兼ねたも  
ので、会場には三枝さんが1998  
年に描いたP29峰の油絵を飾り、黙  
とうの後、大野義昭会長の挨拶で食  
事会開始。三枝さんのエピソードを  
交えたP29遠征の思い出話などがあ  
り、食後は与兵衛倶楽部に場所を移  
して、にぎやかな懇談となった。

2日目の23日は表銀座や「塩の道」  
へ出かけるメンバーもあった。24日  
は丸山庄司さんら3人が川中島CCで  
ゴルフを楽しんだ。

参加者は次のみなさん。

(会長以外は50音順)

(次ページに続く)

## 私の16年

明神 知

私は今、江別市にある北海道情報  
大学の教授として単身赴任していま  
す。野幌駅前から毎朝約10分、冬は  
マイナス10度にもなる中をバス通勤  
しています。昨年9月に赴任して半  
年余り、講義を一通り終えて先生ら  
しい気持ちも芽生えてきました。新  
年度からは講義も増えてゼミ生を持  
つのと、就職部長を仰せつかったい  
ますので、仕事が本格化します。

この大学との関係は、1992年  
ごろ、以前の勤め先で、大学に隣接  
する学習情報通信システム研究所に  
対する研究支援を受託したことに始  
まります。先方の担当者が大学に移  
籍して教授に、さらに学長になられ



## 北海道暮らしを満喫

るとともにカリキュラム・アドバイ  
ザーに委嘱されるなど関係が続き、  
私の定年退職とともに誘いを受け  
たのです。ここには経営情報・医療  
情報・メディア情報の3学部があり、  
情報システムをベースに「デジタル  
ビジネス」「宇宙情報システム」「食  
と健康のヘルスケア」を目玉にして  
います。私自身はこれらの融合領域  
での「デジタルビジネス・  
イノベーション」を推進す  
るつもりです。

10月終わりに初雪があつ  
て11月後半から雪に閉ざさ  
れると、極端に運動不足に  
なります。そこで、雪を楽  
しむことにしました。まず、  
近くにあつて原生林が残る  
野幌森林公園を歩くこと  
です。当初は冬山スタイルで  
歩いたのですが、ツボ足に  
なつてめり込むので、スノ  
ーシューも試してみまし  
た。

また、江別市が推進している「歩  
くスキー」も体験しました。近くの  
公園にコースが整備され、スキーを  
無償貸与しているので、スキー連盟  
の先生の講演と実技指導も受けて何  
度か試しています。さらに、82歳で  
いまだに元気な阪大の恩師がしきり  
にスキーに誘うので、1月に富良野

に日帰りで出かけて一緒にパウダー  
スノーを楽しみました。その足慣ら  
しにテイネススキー場にも2回ほど行  
きました。このラウンジは三浦雄  
一郎氏の居間のようなところで、早  
朝の新雪を楽しんだ後、奥さんと弁  
当を食べて寛いでいる姿を見かける  
こともあります。

野幌から1時間で新雪のゲレンデ  
です。3月にはニセコに泊りがけで  
行つてきました。また、1月には山  
岳部後輩の榊原淳君の誘いで層雲峡  
から錦糸の滝までラッセルしてアイ  
スクライミングを体験してしまし  
た。アイスピックとアイゼン前歯の  
微妙な支点の恐怖と、冷たさに耐え  
るグローブの重要性を思い知らされ  
ました。雪と氷の景色は幻想的で美  
しく、温泉街は「氷瀑まつり」にや  
つて来た中国人客らで賑わっていま  
した。

野幌は電車で20分で札幌ですが  
ら、200万都市の生活も楽しめま  
すし、近郊は自然豊かな所です。こ  
ちらに来て、料理を手始めに家事全  
般に取り組んでいます。おいしい食  
材も安価に入手できるので少々食べ  
過ぎで、血圧と体重が気になつてき  
ました。温泉、グルメ、そして山へ  
とご案内させていただきますので、  
ぜひとも訪ねてきてください。

(1978年基礎工学部卒)

大野会長、出雲路敬孝、稲垣佳夫、大宅幸夫、兼清喜雄、大工原恭、高田邦雄、田中喜樹、廣瀬貞雄、前澤祐一、藪田勝久、山田靖則、山本光二、横尾秀次郎

## 東京支部だより

### 春の懇親会に15人

東京支部恒例の春の懇親会が3月5日午後、東京・西新宿の新宿三井ビル54階「新宿三井クラブ」で開かれた。井上太一支部長は急病で欠席したが、本部から大野義照会長が出席したのをはじめ、幅広い年齢層の会員15人が出席した。

大野会長からは昨年の三枝礼子、住吉仙也両先輩の逝去や最近の現役山岳部の状況などについての報告があり、大島輝夫氏からは住吉さん追悼の言葉があった。

出席者の間では3～5月の山行計画を披露して参加を誘う姿も見られた。また、山岳部員増加に関連して登山用装備調達の補助やOBによる山行指導への補助（交通費等の経費補助）も山岳会として必要なのではとの意見もあった。

大野会長以外の出席者は次のみなさん。（卒業年次順）

大島輝夫、兼清喜雄、野田憲一郎、前澤祐一、米澤成二、酒井次郎、横尾秀次郎、辻信男、出雲路敬孝、石原敏雄、藪本勝、高橋正身、上松一雄、村田正弘（出雲路記）

## 会員の近況

（新年会などの出欠はがきから抜粋。その後の変動などは未確認。卒業年次順〓西暦。敬称略）

**野田 憲一郎**（経60）昨年5月連休に蓼科山でアキレス腱半断裂。帰って整形外科に行ったら即ギプスをはめられ、8週間の松葉づえ生活。その後、リハビリに努め、高尾山と足柄の矢倉岳に登りましたが、まだ以前より登りがしんどい状況です。今年は5月山行は休みとし、その前あたりに丹沢の主稜（秦野ヤビツ峠↓塔の岳↓丹沢山↓蛭が岳（泊）↓檜洞丸↓西丹沢登山教室↓松田）に行きたいと思います。

**畑中 薫**（医69）昨年11月から茨木市の藍野病院で精神科医師として勤めています。週に1回、太極拳を習っており、2カ月に1回くらい旅行に出かけています。

**上松 一雄**（工75）現在、MHP S（三菱日立パワーシステムズ）エンジニアリングという会社におりま

して、毎週、東京・品川3日、兵庫・高砂2日と頑張っております。

**大宅 幸夫**（歯76）夏は沢登り、冬は山スキーという生活パターンを続けてきたのが、最近は脚が痙攣することが多くなり、味付けがマイルドになってきました。娘も歯科医で、手伝ってもらったりして時間的には余裕ができましたが、今度は頭の中身が蒸発していつてるようです。

**重田 邦男**（工79）1年ちよっと前から一般財団法人工業所有権協力センターというところで特許庁の下請けとして先行技術調査をしています。外部とは隔離された環境の中で、ノルマに追われ、非常に忙しくしています。特許情報を扱うため、特許庁以外とは回線がつながっていません。インターネットも閲覧できず、携帯電話も持ち込み禁止です。

**本園 孝**（文81）現在、池田市立池田中学校に勤務しています。特別支援教室の代表です。忙しい日々ですが、休日には近くの低山を徘徊するなど健康維持にできるだけ歩くように気をつけています。

**小松 二郎**（工82）現在、愛知県春日井市に単身赴任しております。電源開発(株)から関連会社であるJPH アイテックに異動し、水力発電所の保守業務を行っております。老朽化した発電所が多く、絶えず補修が必

要な状態で、忙しくしております。仕事柄、溪流を含む川筋を歩くことはありますが、山にはなかなか足が向いておりません。

**畑 秀信**（人84）冬はアイスクライミング中心に毎週活動しています。今年は暖冬で氷の状態は良くないですが、年明け以降、好天続きで、楽しい山行ができています。GWは海外に行きたいのですが、政情不安定な国が多いので、迷っています。

**藤田 繁雄**（医91）昨年12月に和歌山県田辺市でクリニックを開業しました。当面は経営を軌道に乗せることが最優先になるので、山はさらに遠い存在になりそうです。この季節になると、真っ白い北アの稜線が目には浮かびます。

## 編集後記

住吉、三枝両氏の死去を受けて、今号は発行時期を例年より早めました。そのせいで原稿をお願いしたみなさんにはご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。おかげさまで追悼記事だけでなく、山行などの記録も掲載でき、自身の濃い会報に仕上げる事ができました。若い方たちの山行記録などをもっともっと掲載したいので、ご協力をお願いします。

（広報担当・高田邦雄）